

はじめに

西川長夫

研究報告の回を重ねるにつれて、私たちのプロジェクト研究が、いかに松下静雄氏の旧友やご遺族の方々、あるいは茨城・常東農民運動に関わった同志の方々のご好意と励ましに支えられているかを痛感している。前前回の研究報告 (5) には、いいたもも氏の松下静雄を悼む長文の論考を掲載させていただいた。前回の研究報告 (6) には「松下静雄を語る会」の記録が収められている。今回は来栖宗孝氏の論考「農業・農民問題研究のために」をいただくことができた。

来栖氏の文章は、私たち後続世代に戦後の学生運動や農民運動の現実を誤解なく正しく伝える為の深い配慮と厳しい指摘に満ちている。第1節「東大細胞内リンチ事件について」や第5節「吉田嘉清氏の発言の訂正」はそのよい例だと思う。また第3節「山口武秀について」には、来栖氏の山口武秀に対する高い評価とともに戦後農民運動の中心がどこにあったかについての氏の主張が示されている。

この山口武秀評価とともに私が最も読者の注意を促したいのは、第4節「鹿島工業団地開発・建設大事業と五十里武について」において述べられている五十里武という人物と彼が辿った生涯の軌跡についてである。立命館大学の学生時代に、若くして常東農民運動に参加、後には山口武秀から離れて町役場に入り、最後には鹿島市の市長に選出され、巨大な鹿島工業団地の開発に成功し、さらにはJ1の鹿島アントラーズの生みの親ともなったこの人物の生涯は極めて興味深い。この第4節を来栖氏は次のような言葉で結ばれている。

「農民運動の英雄山口武秀は歴史上の人物となりましたが、農民運動の衰退とともに忘れられて行きます。山口時代末期の「家来」(しがない)農民オルグから五十里は、日本資本主義発展の一表象となる人物に成長いたしました。

この皮肉な「歴史の弁証法」を貴研究所が研究テーマとして採り上げて下されば、たいへんありがたいことです。」

立命館大学の研究機関で採り上げるべき研究テーマだと私も思う。来栖先生の呼びかけに応じて、私たちの研究会でも幾度か五十里武の名は上がったが、しかし現在の私たちの力では、研究報告書の1章を五十里武に当てるくらいで終わってしまいそうだ。この研究をさらに本格的に進めるために、立命館大学のどこかの機関、あるいは若い研究者たちが名乗りを上げてくれることを期待したい。

なお、来栖氏の論考の第2節でふれられている『三つ目のアマンジャク』については、ようやく研究会で取り上げる目途がついた。次回か次々回の研究報告では松下静雄の文学作品に関する特集を組みたいと考えている。